

第5回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会 議事録

〔 日時 平成24年10月9日（火）13:00～16:00
会場 札幌すみれホテル3階 ヴィオレ 〕

1 開会案内

2 議事

(1) まちづくり戦略ビジョンの概要について

資料1について、事務局から説明

(2) 専門部会における検討結果について

資料2～資料5について、事務局から説明

<内田>

部会内ではかなり多様なご議論をされたと思いますが、それらを取りまとめたこのような形で整理されています。ご自身の参加された部会というよりは、他の部会をご覧になって、現時点でご意見があれば承りたいと思います。

<福士>

資料2の内容について、各区の連合町内会への説明を実施されていたかと思いますが、その中で、皆さんが考えている中心的なポイント、感想等あればお聞かせ願いたいと思います。

<浅村>

7月から9月にかけて10区の連合町内会長会議に出席させていただき、特に地域コミュニティ部会で検討されている重点戦略の内容についてご説明させていただきました。さまざまなご意見をいただいております。今回は資料としてお付けしておりませんが、最終的にはどういう意見が出たかということについて総括していきたいと思います。

地域の中の課題として、今も色々なことが起きていて、この戦略の中でも取り上げておりますが、見守り、支え合い、たまり場・拠点の必要性については大きな課題であるというご指摘をいただきました。また、そういった中では区役所、まちづくりセンターの役割の大きさについてもご指摘をいただき、特にまちづくりセンターの今後の在り方については特に高い関心をお持ちであると感じております。

<福士>

お願いになりますが、最終的に戦略ビジョンとしてまとめるのでしようが、資料の整理の中で、より具体的に掲載できるものがあれば、細分化したものを示してほしいと思います。文章だけでは抽象的な所があり、見る人によって受け取り方が違うのではないかと思います。

<五十嵐>

大変コンパクトにまとまっていると感じました。私は地域コミュニティ部会に出席しておりましたが、自身の理解も含めて確認したいと思います。

資料2になりますが、最初の「包容力のある地域づくり」の記載として、孤立を防ぐことや支援ネットワーク等の重要性が確認されました。その一方で、地域福祉を取り巻く状況の中で、見守りを強めることが逆に自立を阻害するという指摘もあります。自立支援を求める声が出せない人達に対して、支えの手を出せる地域をつくっていくこと、一人ひとりを支えていくことは間違いないのですが、そういう人たちが声を出せるような地域づくりを進めることが重要だという視点があります。人を支える環境づくりが重要であるということが1点であります。

また、地域マネジメントの推進、ここの役割が重要だと思っています。地域マネジメントを担う主体が見えてきたならば、地域の取り組みを全体マネジメントすることになるので、ここは並列ではなく、もう少し上から地域の環境全体を下支えする仕組みとして位置づけられるものと理解しています。

次に、経済部会の中で投資循環、道内循環ということが取り上げられているのは良いと感じました。札幌が札幌だけで生きていくのではない、北海道とか世界の中で生きていくということ、その中で投資を呼び込むことは札幌の発展にとって重要なことです。

その一方で、健康や福祉等の新たな産業の創造というところでは、ともすれば貧困ビジネスということになる可能性も含んでおりますので、その辺りを排除しながら、あるいはどのように排除していくかという仕組みの中で地域住民の目を入れていく必要性を感じています。

都市部会の内容については、勉強不足なところもあり、教えていただきたいのですが、自立分散型エネルギーシステムについては、イメージが湧かなかったので、補足していただきたいと思います。

最後に、都市マネジメントということで、この考え方もとても重要で、多様な主体が多様な資本の投資を受けながら目標を達成するということになるのですが、具体的な担い手についてももう少し補足していただきたいと思います。

<浅村>

次世代エネルギーシステムについては、いわゆる再生可能エネルギーを含め、CO²削減に資するエネルギーの在り方を探る必要があるということを総体的に考えています。

再生可能エネルギーに留まらず、賢いエネルギー利用について広く推進していくということについて記述しております。自律分散型ネットワークというのは、いわゆるコージェネレーションシステムによるもので、電力と熱を併給していくシステムとなります。発電については系統線に乗せることには規制もあり非常に難しい課題が残っており、国の動向等を見据えて検討を進める必要があります。

こうしたものを含めて、将来的にさまざまな形のエネルギー供給の形があり得るということで、それをまちづくりの中で生かしていく方向性を掲げていきたいと思っています。

都市マネジメントの担い手として、現在でも都心部では二つのまちづくり会社が設立され、いわゆるエリアマネジメントの手法で、まちづくりのマネジメントを担っております。こうした部分については、都心部に限らず様々な地域で生まれてくる主体だと思っています。また、都市全体をマネジメントするという視点も必要ですので、官民の協働というものも含めて考えていきたいと思っています。

<池田>

先般、先住民族の関係で北欧の方に行きましたが、その地域を創った先人の想いを色々な形で表現し

て、残していることがまちづくりの大きなエネルギーとなっていることを感じました。

先駆者の想いを思い起こせるような場面がまちづくりのもう一つの要素として必要になると感じています。そういう視点を持ったまちづくりの在り方が非常に重要なのではないかと思います。それによって活力のあるまちづくりが展開できるのではないのでしょうか。過去に縛られるのではなく、エネルギーになるような先人の想いをもう少し明確に位置付けてもよいのではないのでしょうか。

<星野>

先日、東京と札幌を中継し、未来カフェの有志版を実施しました。若い人が多かったのですが、東京に住んでいる札幌出身者の中で戻りたくても戻れないというお話が出ていました。

参考資料にもあがっていますが、やはり雇用がない、起業をしようにもリソースがないことなどが挙げられていました。経済の部会の議論の内容をみると、創造性について触れていますが、ものづくりの基盤は札幌に備わっているはずで、それを使って食べていけるようなことが重要だと思います。

アーティストの方々ともお話をしたのですが、札幌はそれでは食べていけない、稼げない街だという話が出ており、創造性を生かして事を興すことに加えて、それで生活できる環境を備えることが重要だと思います。

質問ですが、都市構造として交通のネットワーク、緑のネットワーク、エネルギーのネットワークについて具体的な姿が想定されているのか教えてください。

<浅村>

交通は公共交通をベースとしたネットワークとしてイメージしやすいかと思います。

緑については単に公園が点在しているのではなく、グリーンベルトを連携させ、川や緑を媒体として連続させていく取り組みを通じて、市民が緑を感じられるまちづくりを想定しています。

エネルギーについては電気・熱を融通するネットワークの形成、都心部等に備わっている既存の熱供給ネットワークを充実させていくことを想定しています。

創造ネットワークについては地下歩行空間のネットワークの中で創造的な空間形成を図っています。また、オープンスペースとしてネットワークしていくことで創造性を高めることを狙いとしています。

<杉岡>

部会内でいろいろ議論する中で、少ストーンがうまく表現できなかった部分もあるかと思います。札幌市を支える市民の役割というところが、守らなければならない配慮や支援の在り方に引っ張られやすく、市民としてどういうことを自発的に取り組むべきかということが、子どもから高齢者に至るまで人生の各ステージにおいて参加していくプロセスも含めた、責任のある市民の役割をうまく入れておかなければならないと思います。

池田委員のお話も踏まえ、学習機会の提供など、活力を生み出していく人の自主性を引き出していけるような施策の方向性について記述が必要だと思います。

資料4の中で、地域の特性に応じた持続可能な交通体系の検討とあります。持続可能な交通体系とは公共交通料金の値上げにつながるような話にもとらえられます。住民にとって利用しやすい交通体系を考えるとすると、各地で動き始めているオンデマンド型などもあります。持続可能な交通体系ということの意味が今一つ理解できません。補足をお願いします。

<浅村>

杉岡委員のご指摘も含めた交通体系の在り方について検討の俎上に載せていく必要があります。現時点では現行の軌道系の利用が促進されることを前提としており、特出しでオンデマンド交通、コミュニティバス等を掲げることが難しく、こういう記載となっております。地域住民の方々に利用していただけるような交通システムについて、今後、検討が必要であると感じています。

<小林>

お願いがあります。先ほど、五十嵐委員の方から都市マネジメントの概念についてご質問がありました。各部会の資料を拝見した中で、整理をしていただきたいことがあります。

資料2の中で地域コミュニティ部会の重点戦略として地域の活性化、地域を支えていくための概念として地域マネジメントということがイメージされているかと思います。

一言でコミュニティと言っても、地域に根差したコミュニティ、テーマ型コミュニティ、もっとグローバルなコミュニティがダイナミックに存在していることが200万都市の魅力だと思います。

ですから、そこに存在している町内会等、セーフティネットとして地域コミュニティを守っていく、管理していくことは当然ながら、もっとテーマ型で地域を飛び越えてつながっていくコミュニティもあるでしょう。それから世界を飛び越えてつながっていくコミュニティもあります。

そういうものを想定しながら、そこにマネジメントという概念を加えていくことを考えていくべきだと思います。そうでなければ地域マネジメント＝まちづくりセンター＝町内会となってしまうと、閉鎖的な札幌の社会が連想されてしまいます。そのところにダイナミックな視点が求められているのではないのでしょうか。

また、星野委員の方から、東京から戻ってこられないという若者のお話がありましたが、それもある意味での閉鎖的な活動を前提としながら市民の組織活動、支援活動があることに起因しているように思えます。

全体を通して、生活を支えるもの、テーマ型、国を飛び越したコミュニティ、そういうものを適宜サポートしていく、具現化していくためのマネジメントという概念があり、さらにそのためのネットワークや場があるということを整理してほしいと思います。それがなければ、閉鎖的な200万都市のビジョンであるという誤解を招くように思います。

<高木>

人づくりの重要性を一番とらえています。具体的な施策に通じていくための文言なのですが、イメージがこれから背策を作っていく人たちに広がらないのではないかという懸念があります。従来型の言葉が使われており、次にどういう人材を作っていくべきかということがイメージできる具体的な言葉が必要だと思います。

仕事がないから帰ってこられないというのは、本人の社会的な渉外力がないのだと思います。そういうイメージが広がる言葉が必要だと思います。

卒業してくる若者には奨学金が負担となっています。それによって就職先が限定されます。また、マッチングについても企業側に選択権があります。それを若者に移すように奨学金の負担を減らすことも考えるべきではないのでしょうか。政策を作っていく段階でイメージが広がるような言葉探しが必要だと

思います。

<梶井>

社会教育委員も長くしておりますが、その中でも先程、五十嵐委員からご指摘があったように、助け合い、支え合いが強調されすぎると、自らつながりを求めていくところが弱まってしまいます。そこを促進していくようなこととして、「社会的渉外力」「市民として生きていく力」ということで、小さい頃からつながろうとする意欲、市民として生きていこうとする意欲を意味する文言を使うことも求められるのではないのでしょうか。

<内田>

いろいろなご意見があると思いますが、一旦ここで区切らせていただいて、実は、次の議題にありますが、専門部会の中で共通した形でのご指摘が結構ありました。今日の議論にも一部ありましたが、そのことをきちんと踏まえた上で、審議会の最終的な報告書を作成したいという意図があります。

そこで、まず、事務局の方から説明をいただきたいと思います。

(3) 専門部会で出された指摘・課題について

資料6について、事務局から説明

<内田>

これまでの議論は、只今ご説明いただいた指摘事項に通じるものが多かったかと思います。

事務局はこれらのご指摘を真摯に受け止めていくことが重要だと思います。

そこで、資料にあるとおり、私の方から提案させていただきます。まちづくり戦略ビジョンの第1章から第5章まで、重点戦略の前までについては、ビジョン編という形をとり、6章、7章は戦略編として分割して答申するということでもあります。戦略編についてはもう少し具体的なイメージやロードマップなどをきちんと議論したうえで作成したいという意図であります。

ビジョン編を先に出すということにおいて、パブリックコメントや市議会の審議という形でビジョンの内容を知らしめることで、戦略編については意見を伺って考慮していく必要があるのではないかとということでもあります。

戦略についてはあらためて具体的な形で再検討をするということで別途答申するということが趣旨だと思います。スケジュールについては事務局から別途ご説明いただきたいと思います。

会長提案資料 審議会運営スケジュール変更案について、事務局から説明

<内田>

答申を2つに分けるということがまず第1点、その結果として後半部分が先に延びるということになります。今までの会議としてはあまりない形だと思いますが、様々な人が参加して議論することが底辺にあり、それをないがしろにすべきではないということだと思います。こういう形で進めることをご了解いただきたいと思います。

(4) まちづくり戦略ビジョン素案について

資料7について、事務局から説明

<梶井>

市民と行政の役割の明確化について、分かりやすい形で記載していますが、「みんなで取り組むこと」という部分に引っ掛かりを感じます。全員に限らず市民一人一人が取り組むべき事柄を記載してあるはずなので、「みんなが取り組む」あるいは「市民が取り組む」という表現では駄目なのでしょうか。

<内田>

これは「行政だけではやれない」ということを意図しているのでしょうか。梶井委員のご指摘は責任分散型の書き方はよくないということだと思います。リスク分散をどこかに暗示させるような内容にすべきではないということだと思います。

<小林>

もう少し、違うモチベーションを引き出すことを考えるべきだと思います。社会基盤を含め、行政だけではできないというのは当然なのですが、ここ 4~5 年、コミュニティマネジメント、ソーシャルマネジメントの国際会議の中で当たり前のように議論されつつあります。これまでは企業が社会的貢献として、いろいろなことをしなければならぬ役割がありましたが、最近はそれよりももう少し積極的に企業が社会に対して責任を持って投資するということがメインで議論されつつあります。

そういうことを前提に組み立てていくことが、これからの官民の組織体としての社会なのではないでしょうか。SRI のように国際的な投資のモチベーションが動くところに札幌がコミットできる枠組みや意識を持っているということを示すべきではないでしょうか。そうしないと世界から忘れられてしまう札幌になってしまうのではないのでしょうか

<内田>

もっとダイナミックに展開しないとこじんまりした市民生活の領域を出ないということだと思います。ダイナミックな展開が本当に求められており、企業は市民感覚のところから出がちであるが、すべての構成メンバーで考えていく必要があると思います。ダイナミックに動くのはやはり企業であり、いろいろな形での参加を考えておく必要があると思います。

<近久>

一番重要なのは誰がこれを実行していくかを考えた場合に、市民からすると札幌市がやってくれるととらえがちでしょう。65 ページの「ビジョンの推進に当たって」では、本当は市民が負担もする覚悟を持ってもらうことが必要でその呼びかけに欠けていると思います。

市民が参加するというのは意見を言うだけではなく、そこに負担もあるということを理解してもらう、ビジョンを受け入れるためには、市民も負担していく覚悟を持ってもらうため表現がどこかにできないかと思います。

<浅村>

67 ページの「限りある資源の有効活用」という中で官民の役割分担や社会的な費用の増大が想定される中で、いかに知恵をしぼって市民・企業・行政がまちづくりを進めていくのかということは記載しているつもりです。表現ぶりが弱いということなのでしょうから、修正していきたいと思います。

<内田>

行政としては一番難しいところなのでしょう。そこは、本来は政治の部分が発言していくべきなのでしょう。どういう風に表現していくべきか、いかに誘導すべきかということを中心に頭においてやってほしいということで理解すべきでしょう。そこでいかに具体的に進めていくかということまで踏み込むと、プログラム自体が市民に反対されてしまう可能性もあります。

書くというよりも、具体的に話をしていくことが遠回りのようですが、一番確実なのではないでしょうか。

<星野>

基本目標の達成基準がないと思います。定性的な姿ではなく、ある程度の数値目標がなければならいのではないのでしょうか。どの状態になると達成したことになるのかという判断基準が必要だと感じました。

<浅村>

庁内的にも議論を進めています。ビジョンの実現のために個別の部門別計画を策定することになります。その中で基本目標に対する定量的な設定がなされ、それがビジョンの考え方をいかに、どれくらい達成していくかを示すことになります。

また、重点戦略の議論の中で、もう少し戦略的な取り組みの方向性を示していくことになるので、どのような形で目標設定ができるかということも合わせて議論していただくことになるかと思います。

<池田>

みんなで取り組むことと行政が取り組むこと、言葉の問題なのかもしれません。

その意図として、例えば、みんなで取り組むことという中では、民間がそれぞれの立場で取り組むということなのか、そうではないのか、また、行政が取り組むことということについては、行政が行政枠を超えて横断的にまちづくりに取り組むということなのか、その辺りをもう少し明確にする必要があるのではないかと思います。

<浅村>

ご指摘のとおり、行政だけが何か行動して済むということではないと思います。そのコーディネーターや市民の取り組みをいかに引き出していくかということも含めて、行政がこれから取り組んでいくべきことを示していく必要があり、その点、ご指摘の通りだと思います。

<池田>

これからの勝負の一つとして、官民一体として取り組む中で、横断的な行政の在り方というのが求められます。私も市民であり、企業人であり、町内会の会員であり、民間においてもそれぞれの立場であ

るが、一体となって自分の領域に中で取り組むことが掛け合わさって官民一体の姿が見えてくるという表現があった方がよいと思います。

<浅村>

4章の位置づけの中でそれが分かる様な表現をした上で、市民、企業を含めた取り組み、さらに行政の取り組みを横断的にやっていくことで達成されていくということが分かるような書き込みをしたいと思います。

<杉岡>

「みんなで取り組む」という所は行政が取り組んだものを実行する役という意味合いになっている記述が多い。それは活動に参加する、理解するという事になってしまっているため、なるべく誤解を生じないようにチェックする必要がある。市民の役割として決定に参加するということが重要だと思います。理解を誤るような内容になっているので、基本目標の中で位置づけたうえで、決定に参加し実行に参加するという部分をもう少し明確にすべきではないでしょうか。

<石森>

非常に多岐にわたる問題に取り組んでいるとは評価しています。一方では非常に内向きな印象を受けます。

神戸から札幌に移住して7年になりますが、来た当初はすごくよい街だと感じていたものの、最近ではあまりよい街ではないと感じるようになりました。それは非常に内向きであり、190万都市として、もっと世界に開かれるべきだと思いますが、意外に小市民的なところがあります。それは外国人居住者が少ないということにも現れているかと思います。市民もそれに何の実感も持たずに「そんなものだろう」と受け止めているところがあります。

今回の計画でも一つ気になっていることとして、人口減少の問題が取り上げられていますが、データではたった2万6,000人しか減らないということですが、恐らくもっと減少することだと思います。その際に札幌はクローズド路線でいくのか、もっと札幌、北海道が持つ可能性として、より世界に開かれた方向でいくのかということがあります。

現在の市民の感覚としてはこのビジョンの内容でよいのですが、それは確かに現在の市民の想いが汲み取られたもので、本当にそれでよいのかと思います。審議会委員としても重要な役割を付託されており、少なくとも10年先をどのように見据えていくかと考えると、札幌が本当に多くの人を受け入れる街になるのでしょうか。現実的に人口が減少する中では経済的に厳しい状況にも陥ります。

特に深刻なのは若い世代が道外に流れているという状況で、非常に気になっています。それは単に人口が減るというだけのことでなく、もう一つの重要な問題なんでしょう。ですから、若者が将来を描ける、札幌で自分の人生を切り開けるようにすべきではないか。

札幌という街は市民のためだけの街なのか、恐らくその発想はおかしいのではないかと思います。現に今日の札幌には外から来た人たちが大勢いて、その方々が相当のお金を落としています。

誰が様々な負担を負うのかということについて近久先生が仰っていたかと思いますが、諸外国の190万都市を見ると、当然のようにアコモデーションタックス、あるいはチャージを取っています。10年後を見据えた際に、市民だけを見ているのではなく、世界に開いた計画として考えるべきではないでしょうか。

これから札幌に来て、新たな業を興し、仕事を展開する方もいらっしゃるでしょう。しかもそれは日本人だけとは限らない。アジアから入ってくる方々もいるでしょう。最近感じる事として、北海道全体が排他的になっているということがあります。

審議会の委員としては、広く未来を見据えている必要があると思います。札幌の未来をつなぐ子どもたちのため、つまり「市民のための札幌」としてビジョンを作るのか、もっと視野を広げて、外から来る人もターゲットにしたビジョンというものもあり得るのではないかと思います。

全体として、今日出されている資料はよくまとまっているとは思いますが、これに加えて何かが必要なのではないかという意味では少し飢餓感を感じます。

<内田>

市の計画がダイナミックではないということはありません。行政が作った計画として非常にきれいではあるのですが躍動感がないというのはその通りだと思います。その観点では外との関係をもっと意識する必要があります。

まず人を呼び込まなければならない、住んでみたいということが自然環境だけではなく、生活できることが必要であり、ダイナミックな動きがないといけません。

非常にスマートなまちづくりという印象がありますが、もう少し泥臭く、ダイナミックな魅力の軸が何かを考える必要があるでしょう。

今回の計画は死ぬか生きるかというところの計画なのだと思います。これは札幌市に限った話ではなく、衰退していく中で札幌はそれに反することができるか、札幌固有の魅力を探していくことには相当のエネルギーが必要になると思います。

一方では、先ほど来お話にあるように、市民が自覚することも重要なでしょう。

<五十嵐>

具体的にどう取り組むかと言うときに、行政がいかに地域に出ていくか、市民活動のレベルに議論を進めていくかという組織的な課題も出てくると思います。

また、市民が協働の中では負担していくことも重要でしょう。どういうシステムが最適で、そのためには誰が負担すべきかを議論することがスタートラインだと思います。現実をいかに共有し、方策を考えることが一つだと思います。

投資機会についてももう少し具体的にしていくことで、内向きの循環だけではなく、外向きの循環を創造していくということを訴えかけてほしいと思います。

(5) 都市像の設定について

資料 8～**資料 11**について、事務局から説明

<内田>

都市像ということで一つの具体的な像を結びたいと思いますが、一方ではなかなか難しいと思います。どういう軸を持つべきかということを中心にご議論いただきたいと思います。札幌市の都市像を見る、あるいは見てもらう場合の軸を、内においても外においても示すことができるものは何かということで、事務局の案も提示していただいております。これにこだわる必要はありませんが、札幌という都市を作

り上げていくための視点についてご議論いただきたいと思います。

<木下>

第3章の目指すべき都市像と第7章の都市空間像の違いをどう整理すべきかを教えていただきたいと思います。

<浅村>

都市全体が向かっていく先として、目指すべき都市の全体像となります。7章の都市空間像は都市空間計画として、都心、郊外住宅地における地区の在り方を含めた都市空間のあるべき姿を規定するものとなります。

<木下>

都市空間も都市像に絡んでいくことになると思います。その整合性が今後重要になると思います。

<梶井>

今の木下委員のご指摘もありましたが、3章と7章のレベルがまだ整理できていません。創造性、オリジナリティという割には聞きなれた言葉が多いと思います。奇をてらう訳ではありませんが、一丸となって都市づくりを進めていくという気概に欠けていると思います。ここにはないものとして、「誰もが力を発揮できる社会」ということが人口減少、少子高齢化、震災に共通するキーワードになるのではないのでしょうか。

<田村>

最近、必要なキーワードとして「相互補完性」という言葉があります。絆という言葉が以前の審議会でも出ていました。必ず相手がいって、相互に補完し合いながらまちづくりを進めていく、相手と一緒に能動的に行動を起こす、そのための相手を探していくことになるのではないのでしょうか。「一人ではない」という意味合いを込めて、造語できないかと思います。

<五十嵐>

軸の話として、これまでは2つの軸がありました。いずれも生活をする、都市生活を楽しむという消費都市というイメージがこれまでは強かったのではないのでしょうか。

生活の軸と、仕事・経済の軸があって、それらが内向きではなく外にも打ち出していけるということになるのではないのでしょうか。そういうイメージ作りができればよいかと思います。

<川崎>

パラダイムの転換ということで挙げている3つの視点はどこの自治体も非常に意識していることかと思えます。札幌市はそれを率先して、いち早く迅速に行動していくという意味合いの言葉が欲しいと思います。

もう一つには市民のための市民が考えるという意味を込めることで、市民が考える能動性が必要になるのではないかと思えます。共生、創造いずれもありがちだということは感じています。

<山田>

どちらかという創造に関心があるのですが、先月、ロシアで学生と公開作品を展示してきました。創造することは先が分からないから価値があるというお話を現地の方から頂きました。

札幌で創造するというときに、それらがイマジネーションできないからやってみたいというモチベーションが重要なのではないのでしょうか。乱暴な言い方ではありますが、都市像はコントロールできないものだという視点があるのではないのでしょうか。

創造＝コントロールできないということがあり、パリっとした視点では言い切れないという部分があるのではないのでしょうか。検討の際には消してみても、絞っていくということがあってもよいのではないかと感じました。

<内田>

その通りで、こちら側にいる研究者はそういうアプローチをしてみたいとも思うのですが、行政的にはそれはほとんど不可能なんでしょう。そういう視点で考えることも確かに必要なんでしょう。防御の仕組みとして書いてあることが行政的には重要であり、それによって「ここに書いてあります」と言えるのでしょ。一方では書いてなければならぬものを消していくには非常にパワーが要ります。必然的に必要なものはチョイスしているはずなので、そこでなぜそこを先行してやっていくのか説明できるようにしている。庁内で合意がとれていることの方が重要なのではないのでしょうか。

<小林>

全体が出来上がった時に、出版したり、公表していくことになります。実際にいろいろな方とお話するとホームページに載った札幌の姿を見ているのは市民以外の方が多いのが実情です。特に海外の方が多い。そういう意味では現在の4次長総の英語版の内容は非常にブアだと思います。

戦略ビジョンと銘打って、ある危機を乗り越えようとする際に、先程の田村先生のお話にもありましたが、相対するのは誰か、市民は当然ながら、それ以外の方もいらっしゃるでしょう。

都市像の部分は必ずホームページに載ることになると思います。その内容が海外にとって魅力がなければ戦略ビジョンとしての価値はなく、かつての地方自治法で定める行政計画としての価値しかないのではないのでしょうか。他の競合すべき自治体は戦略的にどういうことをやっているのかを横目で見ると、どういうメッセージを地域、世界に発信していくかを強く意識する必要があると思います。

<内田>

事務局から相談を受けた際に、少なくともアジアの都市でどういう謳い方をしているのかを調べてほしいというお願いをして、事例を見たのですが、アジアの主要都市の都市像のメッセージは非常に陳腐でインパクトに欠けるものでした。

小林先生がおっしゃったように、我々が他を見るように、他都市も札幌を見ます。その際に札幌のメッセージが端的に発信されることが重要だと思います。

<近久>

ダイナミックさ、世界から見るという視点もあるのですが、資料10を見るとここに札幌の特徴

が出ていると感じました。一般的にはグローバル、競争という方向を目指しがちですが、札幌は内向きかもしれませんが、市民が心の豊かさに価値観を置くように見えます。

そうなる世界的な動向とは違って、内向きな社会を作っていこうとしているようにも感じました。それはそれで悪くないとも感じています。

<内田>

都市に若者が集まるのは、昔の動向から言うと、都市に行くことで匿名になり、自由に振る舞えるということがありました。つまり、伸び伸びとした青春が送れるということが大きな動機でした。そういう意味で若者が束縛されないエネルギーを匿名の中で実行できるというメリットがありました。

ところが今日的にはつながりたいということで、逆に閉じこもる傾向があるかと思います。そういう意味からいうと、絆、つながっているということは自分の自由な行動を束縛されることとなります。今の若者がそれをよしとするのか、もっとエネルギーを爆発させる街にするのか、それが非常に重要なスタンスになるのではないかと考えています。

絆を求めるというのは無意識に相互扶助を求めているということなのではないでしょうか。都市が持っているエネルギーなものが、今日的には何か、それをいかに引き出すかが都市像に求められる内容なのではないでしょうか。

個人的には札幌市に面白い人が集まる仕組みがあってもよいと思います。そういう意味ではいろいろなところとつながっていることが重要でしょう。

<高木>

私はそれほど悲観していませんが、NPO 情勢がここ 10 年で様変わりし、参画する人は増え、つながりやすい環境ができつつあります。よそに行くと、札幌のつながりやすさというのは大きな特徴だと感じますし、それをいかに伸ばすかが重要になります。

先週、社会的なコーディネーターをいかに育てるかということでワークショップを開いたのですが、学生からお年寄りまで満遍なく集まりました。

今まで顔が見えていた NPO の人材以外の人材が現れております。それはそれで課題が生じているのですが、登場人物が増えているというのは間違いなく、古くからの人材は工夫していかないと新しい人材のクオリティには勝たなくなってきました。そういった緩やかな競争が NPO の中で起こっています。

地域社会でも疲弊しつつある中で、新たな人材が台頭しつつあり、非常に顔が見えやすい状況にあります。そういう方々といかに連携していくかということを経営的にバックアップしていけば良いという状況にあります。ここ 10 年でポテンシャルは非常に高まっています。さまざまなセクターの人材が動きつつあり、逆に自分のような古参は苦勞しています。

<五十嵐>

エネルギーをいかに作るかということで、山田先生はコントロールがない方がよいということがありました。マネジメントというのは管理という意味ではなく、ないところから物を作り出すためのマネジメントとしてとらえるべきでしょう。ただし、そこには現状を見据えるためのデータ、仕組みに係る情報が必要で、その環境を整えるのが行政の役割でしょう。何かをやりたいと思った時にできる素地を作ることがこの計画では必要になるのではないのでしょうか。

何かを消すといった時に、「魅力」という言葉がずいぶん使われていますが、あえてこれを消すべきではないかと思います。魅力ありきで考えると、安心できるのですが、その実態が明確でないままこの言葉にとらわれ過ぎているのではないのでしょうか。むしろ、この言葉がなければ、「みんなでそれを探そう、何が魅力なのでしょう」ということもあるのではないのでしょうか。この計画を作る中で「こういうことなんだよ」と投げかけることがもう一つのビジョンの役割になるのではないのでしょうか。

<池田>

この流れには当てはまらない発言になるかもしれませんが、規制対策が入る余地があるのかということが気になっています。

それは、まちづくりに入っていくモチベーションの一つではないかと思います。そういう精神を盛り込んでもらえると身近なビジョンになるのではないかと思います。

<高木>

整えるかどうかということでは、行政的には整えないと難しいということがあるのでしょうか。ところが世の中の的には整えないまま走って、よりベターなものを作っていくという流れになっているように感じています。

そのポテンシャルは札幌には間違いなくあると思います。行政側の姿勢も感じるので、その素養は間違いなくあります。受け取ってどうするかという次の仕組みを考えているという状況にあり、何かチャレンジする際に実現しやすいことが札幌の特徴なのではないのでしょうか。

<梶井>

創造力というよりも安心して羽目を外せる、冒険できるということで若者のエネルギーを爆発させることができるのではないのでしょうか。行政はそういう人たちに対して失敗してもフォローできる姿勢を見せてもよいのではないのでしょうか。

<内田>

安全弁があることが冒険と呼べるかということがあります。冒険するということは未知の者に対して、成功すれば大きな対価を得られるが、失敗するというリスクを背負うということが一番のポイントになります。札幌はリスクを取る形での取り組みはなく、非常に整った形で物事が進められています。今の議論ではそういう部分からの脱却という側面が強いのではないかと感じています。

<星野>

札幌は適度に狭く、札幌で行動すると、東京に比べると目立ちやすいと思います。一度失敗するとうまく埋もれることができないのではないかという話がありました。市民の中で新しいことに取り組んだ時に、それを評価できる意識があれば良いと感じます。

<服部>

先日、イベントで大通公園にいらっしゃっていた海外の方がとても美しい街だとおっしゃっていました。外から人に言われたときに自分の街がどういうものか理解できるかと思います。

もう一つは、ここ1年くらい街中で仕事をしていると、街の持っているエネルギーが落ち込んでいると感じつつあります。街の持つ熱量を考えると、他都市で持っていると感じられるものを札幌はどれだけ持っているのか感じるところがあります。

価値ということで「使用価値」と「価値」という2つの理解があります。自分の街がどれだけの価値を持っているのか。新しい価値を作れる最後のチャンスだということを世界に向けて発信していくマインドを持っていく必要があると感じました。

<近久>

今までのキーワードを聞いていると、札幌の将来への不安から出てきているのではないかと感じています。世界競争の路線では持続可能性はないと感じています。

突き詰めると地産地消ということが答えになると思っています。そういう社会づくりが持続可能な社会づくりにつながるのではないのでしょうか。

地産地消として豊かな雇用を生み出していくこと、経済を一義とするのではなく、市民のつながり、心の豊かさを培っていくということを掲げているのは先駆的なのではないかと感じています。

<浅香>

審議会に参加している中で、戦略ビジョンを作る意義というものを考えると、誰に知らしめていくのかが分からなくなりつつあります。市民に対して、文字・言葉でしか伝えることができないのは確かですが、その言葉の在り方、見せ方に不安を感じています。

せっかく作ったビジョンが関係者しか見ないものであれば何の意味もないのではないのでしょうか。この10年計画が作られることでより良い施策が繰り広げられるために市民の方に広く知っていただくことが重要だと思います。最初の1枚をいかに作るかによって広く知られるビジョンになるかどうかのポイントなのではないのでしょうか。

<小林>

日本国・北海道・札幌というのがかつての存在でした。今日ではそれがフラットで、若者も隣の人が何をしているのかを知らずとも世界の裏側の友達のごことはよく知っているという関係になってきました。その時にある社会集団としての札幌、あるいはそれを支える人たちがどういう方向に行こうとしている意志を有しているか、それは社会の財産になるのではないのでしょうか。

ですから、さきほども申しましたが、行政の内部の施策を位置づけるための総合計画というだけではなく、これまでとこれからの札幌市民に向けてどういう生きざま、存在を示すべきかを忘れるべきではないと思いました。

先日、東北の被災地の方々と長く議論したのですが、その際に思ったのはアメリカで大きな台風が来た際に、企業はその災害に便乗して非常に潤いました。

それと同じことを被災地の方がおっしゃっていました。かなり冷静に経済の動きを見ていました。世界につながるということは、シカゴ学派的論理に乗るということではなく、自分たちの存在が異なる社会存在の中で子孫に自信を持って生きてもらうための環境を整えるということにつながるのだと思います。世界とつながるといふことと世界で勝負するといふことは別物だということも改めて認識したいと思います。

<内田>

創造、共生といったキーワードを軸とすること自体には反対がなかったと思います。小林先生も石森先生もおっしゃっていましたが、札幌の都市像は外に向けて発信すべきで、そういう意識を持ってほしいと思います。市民に語るだけではなく、市民が知ったうえで、外の人に言えるメッセージとしての役割を有することにポイントを置くべきだと個人的には考えています。

軸としては、創造、共生で構わないと思います。これをいかに外側にアピールするか、そういうメッセージ性を有しているべきではないでしょうか。それがないと札幌は変わらない。それはなぜかと言うと、人が変わろうとするときには第三者にそれを宣言することで負荷が発生させる必要があります。実現しようとする意志があるのであれば、そういう意識を持ってメッセージを作っていく必要があるのではないのでしょうか。

<浅村>

今後は10月29日に次回の審議会を開催し、ビジョン素案について検討したいと思います。よろしくお願いいたします。

<内田>

それでは本日の審議会はこれで終了したいと思います。ありがとうございました。

以上